第二十四条　謡ふ時身の持ち様

底本：高知本　対校本：鴻山本

【翻刻】

第二十四　謡時身の持やう

先ゑもんはうらつに着る事なかれ。衣装善悪にハよらす、前方よりも引つくらふて置へし。座になをりて、けしからす引つくろふハ大きに見苦敷物也。扨正座して、ひさを能定めて胴をすへ、身をすくめす、乍去のつけにそりかへる事にハあらす、すこしかしらをさくる心に、ひたひに心を付物也。大ていシテワキハ指向物也。しぜんすしむかひなりとも、其あひうたひの方へこゝろをくはつてうたふ物也。又其相うたひの方へ居なをる事もくるしからす。とかくいつれにても、あまり人の目にたゝぬやうに可被成候。扇の持様、左の手をひざにをさめ、右に持て、あふきのすへをたゝミに付る事、常の習ひなり。或ハ又あふきを左のひさの上の手にうつしてうたふ、くるしからす候。只たしなむへきハ、顔の見苦敷からぬ①専一に候。

秘事にいわく、我目の見付たるむかふより、我はなのさきへ、たとへハ糸をはりて引かことくの心持といへり。つよく引は糸きれ候。よハく引は糸たるミ申候。只たるますして、ゆたかになるこゝろ持にうたひ申せとのおしへにて御座候。本よりすくれたる貴人の御前なとにてうたへと仰くたさるゝ時ハ、御ゆるしなけれハ、かしらを上てハ

うたハぬ事に候。

【校異】

①　専一―第一（鴻）

【現代語訳】

第二十四　謡をうたう時の身体のあり方

まず、着物をいい加減に着てはいけない。衣装の良し悪しに関わらず、あらかじめ綺麗に整えておくべきである。所定の座に着座してから懸命に整えようとするのは、とても見苦しいものだ。

さて、正座する際は、膝の開きを決めて上体を落ち着けるが、前屈みになるのではなく、さりとて仰向けに上体を反らすわけでもない。少し頭を下げるようにして、額のあたりに意識を集中しておくのである。

（素謡の時は）シテやワキをうたう場合は向かい合って息を合わせる相手がいる。地謡の場合はそれらの役とは斜め向かいになってしまうが、その時は同吟している他の地謡役に気を配ってうたうもので、隣の人物の方へ向いて座り直してもよい。ただしどのような場合も、あまり人の目に付くようなことはすべきではない。

扇の持ち方は、左手は膝の上に置き、右手に持って、扇の地紙の先を畳に付けるのが通常である。あるいは扇の末を左手で受けるように持ってうたってもよい。心掛けるべきことは、うたっている時の顔形が見苦しくないように気をつけることである。

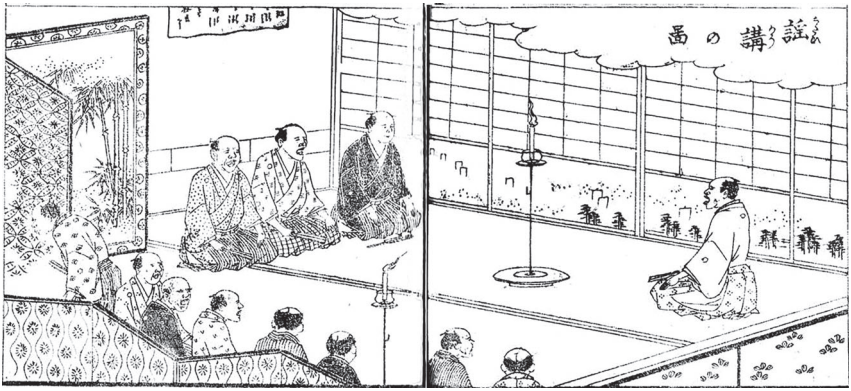
秘事に言い伝えるところは、（身体のあり方は）見つめている向こうから自身の鼻先に糸を張り、その糸を引く

ような心持ちであるという。強く引けば糸は切れてしまい、弱いと糸がたるんでしまう。糸がたるむことなく、安定した状態にある心でうたうのがよいのと教えである。言うまでもないことだが、極めて身分の高い方々の御前で「うたえ」と仰せつけられた時は、お許しがなければ頭を上げてうたわないものである。

【解説】

衆目の前で謡をうたう際の注意について説く一条である。服装・着座・扇の持ち方・姿勢などの諸点に対する事柄を述べるが、先行する謡伝書を受けた内容と、『うたひ鏡』を嚆矢とする説が合わせて記されている。最初に書かれる着衣を整えておくことや着座の姿勢に対する注意は、『八帖本花伝書』の能の出立や舞台に出る直前の幕内の身拵えに関する記述に、近似した表現が見出だされる。それ以外にも直接的関連はないものの、『能覚書』（彦根城博物館寄託喜多流能伝書。江戸初期）や、同書の説を引く九世喜多七大夫古能の『寿福抄』などに能の立方の身体論があり、それらに本条と似た説も見えることから、立方の身体説が本条記述のきっかけになっているかもしれない。

謡をうたう際の注意点を述べた箇所は、現在のように全員が同じ向きに着座するのではなく、向かい合って着座することに言及するところから、江戸時代に行われていた謡講などを前提としたものかと思われる。参考に示した「謡講の図」を見ると、座敷の右奥にシテ役、それに向かい合う場所にワキとワキツレ（あるいはツレか）の各役が着座している。また手前側に居並んでいるのが地謡で、左の二人は右隣りの人物の方を向いており、まさに本条に合致する状況が描かれている。なお、この絵図は江戸後期刊の小謡本の挿絵で、つまり本条に説かれた素謡の場の慣行は、江戸期を通じて行われたものであったということができよう。



「謡講の図」（『万葉小謡千秋楽』に拠る）

うたう際の扇の持ち方は、右手に持って扇の先を床につける持ち方と、膝の上で両手に持つ持ち方のいずれでもよいとするのは、『うたひ鏡』が編まれた江戸初期頃はそうした約束事が緩やかであったことを思わせるが、現在の能楽シテ方五流では、流派によりいずれかの持ち方に決められている。

最後の「秘事にいはく」の一節は、前後に体を揺することなく安定した姿勢で、「豊か」（気が充足していることか）な心持ちでうたうことが大切であるとの教えを、糸の張りの強弱を例に説いているが、先行する謡伝書『五音　観世道見書物』（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵）に既に同様の説が見えている。ただし一部文言に出入りがあり、『うたひ鏡』本文の方が具体性を意識した記述になっている。また、後出の伝書として『音曲玉淵集』に類似の内容が記されているが、その本文は『うたひ鏡』よりも『観世道見書物』に近い。

【参考・関連資料（抄）】

ゑもんはうらつに　ひきつくらふて　胴をすへ

『八帖本花伝書』五（日本思想大系『古代中世芸術論』）

先、能と言ふ本意は、面白きを本とす。仕立見苦しければ、見所なし。衣装の着やう、衣紋悪しければ、その姿見られぬ物也。たとひ上手たりと言ふとも、仕立て悪しければ、身体に花咲きがたし。

『同右』五

一　幕のうちと言ふ事、習あり。是、出る時の顔の持やう也。出さま浅まなれば、その能、果てゝまで不出来成能也。出さまさあつべければ、能、真にして、後まで能出来候物なり。是、第一の習なり。先、幕際に臨みて、さて身形を直し、顔持を定め、腰を据へ、胴作りを構へて、衣紋を引繕ひ、さて、幕を上げさせて出で候とき、天地和合、左右の目遣ひといふ事有。

『寿福抄』（『国立能楽堂調査研究』3に翻刻掲載）

一　腰ハ前へ張出したるがよし。踵を強く踏て腰を前へ出す時ハ、前へハ取られず。伝書有之様ニとて、腰を後ロへ引付れバ、腰居付ものなり。向へ腰を引るゝ時ハ、腰ハ前へ出るなり。其上にて前へ引倒されぬ様に踵を強く踏めば、腰居付かずして強し。是伝書之通りなり。尤も腰ハ随分うつむくがよし。背ニてハ十四の推の所を押込たる様にすべし。腹にてハ、臍のうつむく程がよし。如此ニすれバ、必ず後ロへ引けるものなり。夫故随分張出す方がよし。

一　胴ハ中が反りて前へ出たるがよし。臍下を張るが吉とて下を張出せば、胸畳ミ引なり、天突か鳩尾之辺引るものなり。胴ハ横より見れバ、如此ニ見ゆるが吉。腹の形上張にても、心気下る時ハ上つりには見えぬものなり。

人毎ニ天突居付くものなり。随分天突を張出し不居付様ニすべし。是胴作りの第一なり。

一　首筋ハ上へ引立る様心得べし。

一　頭ハ上へ引立る様ニ心付肝要なり。頂ニ環を打、綱を付て、上へ引立たる様にせよと、古人申置しなり。腮居付くか、兎角居付易きものなり。頭の骨ニ居付ぬ様心掛専一なり。頭と骸とハ放れたると思ふ程にてよし。

一　顔ハ随分柔和ニ見ゆる様ニすべし。座敷舞ニ不限、面の下といへ共、柔和ニ可心掛。顔ニ癖有れバ、身ニ癖出るものなり。別而、眉を左右へ開く様ニすべし。是第一なり。

秘事にいはく

『五音　観世道見書物』（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵）

一、謳をうたふに、むかいたる所にくぎをうちて、いとをはりてひくかことくに謡へし、つよくひけはいときるゝ、よはくひけはたるみ有、きれすたるますして、ゆたかに成やうに用へし。

『音曲玉淵集』五「用心慎みの条々」（昭和五十年臨川書店復刻刊）

一　謡ふ時に向ふたる所に釘を打、糸をはりて引か如クに諷へし。強くひけは糸切る。よはくひけはたるむなり。きれすたるまず、豊かなるやうに心得へし。

（恵阪 悟）